

“Pennsylvania German dialect” の歴史的背景論

川久保 精 祐

“Come on over to our hawse.” 強い “Pennsylvania German dialect” を半分理解するのがやっとだったが、community の preacher に説明を受けながら念願の家族を一日体験することが出来た。そして今何故「ペンシルバニアジャーマンダイアレクト」が存在するのかを教えられた。

“Be not conformed to this world, but be ye transformed by the renewing of your mind that ye may prove what is that God and acceptable and perfect will of God.” (Romans 12 : 1)

アメリカ社会では、この “Bible の教義” から何が想像されるかと言うと、“There is no group of Amish or Mennonites anywhere in the world that an applicant who is truly willing cannot join.” ということになる。私たち “outsiders” が仲々帰属することの出来ない集団、即ち異質な生活ルールを持つ Mennonites 系 Amish, A new Amish, Old Order Amish のような社会集団は他にも存在するであろうか。否や存在しないと思う。

唯一の問題は、Amish 社会への入植希望者が本当に喜んで、自発的にキリスト教の門弟としての身分を受け入れ、この Amish 集団の生活習慣に答えられるかどうかである。この集団の一員である為の必要条件が厳しければ厳しい程、外の世界からこの社会集団に加わる人は益々いなくなるであろう。又この逆のことも言える。必要条件がゆるければゆるい程（安易であれば安易である程）、即ち “community standards” と “the Ordnung of the church districts” の解釈が “liberal-progressive” であればある程、より多くの “outsiders” が仲間に入植するであろう。

そこで、この異種独特な社会集団である…… Amish 文化と Mennonites 派文化について更に深く論じるに当たり、この第二説では、先ず15世紀の北ヨーロッパの茫漠とした不明確な世界にどのようにして、人間中心の宇宙の創造主である神が「罪深い人間」のつぐないとして宗教的に力を得て来たかを調べてみた。前回の紀要の継続として特にペンシルバニア州、ランカスターの Amish 文化と Mennonites 文化を具体的に調査研究の対象とした。

歴史的見地

1483年、マルティン・ルターが生まれた時、ヨーロッパは中世後期の冬眠状態から、丁度目ざめかけたところであった。歴史が示すように、都市は商業活動によって活気を取り戻し始め、鉱山では機械がうなりを発していた。印刷機が発明され、紙が製造され、読み書きは学者だけのものではなくなりつつあり、ドイツの大学は細胞が分裂するように増加していた。又人々の生活史を調べてみると、当時、アルプスを越えたイタリアでは、ルネッサンス運動が人々の心を死後の天上の楽園から、地上での生活の歓びへと向けられていた。ライン河の彼方のフランスとイギリスは、即ち運動のほこをおさめていた。そのまた向こうのポルトガルでは、さすらいのジェノバ人クリフトファー・コロンブスが大西洋を西へと横断して、アジアの富に到達しようという計画を、疑い深い宮廷に提出し、援助を得ようとやっきになっていた。その頃印刷機が発明されたことによって、キリスト教の思想ばかりでなく、非宗教的な思想や、他の宗教の思想も同じように広められ、また急速に、知的生活と社会が改革に向かった事が想像出来る。人々は聖書や本を読めば読むほどに、独立心をかき立てられ、思想の交流も促進され、それと共に、社会と教会に対する批判の聲が高まったのであろう。1505年、まだ22才にもなっていなかったルターは、エルフルトにあるアウグスティン派の修道院に入った、とされている。

彼が加わったこの宗派は、数ある修道会の中でも、最も勤勉であり、その修道院は、その会員を助けて救いに導く意図のもとに、厳格な規律によって設立されたものである。中世の修道士の生活は「蛮族の攻撃下で消えうせてゆく古

代ローマ文化を保存したり、暗黒時代のキリスト教をヨーロッパにあって、数百年間、若者に訓練をほどこしたり、また森林を切り開き、土地を開墾したり、貧乏人を援助し、病人を看護した。」など大きな役割を果たしている。しかし、ルターの時代の修道士は、だらけた生活態度と、財産や特権の濫用のために、非難的になっている。しかしルターは、彼の特徴とでも言うべき勤勉さと熱意とをもって、自分の責務（極度の断食をしたり、夜中まで長い時間祈禱をするなど、苦行のいくつかを実行している）を果たしている。時代は以前にもまして信心深い人々が、社会と教会の欠陥に憤慨し、いたるところにルターが危惧していたかけりがあった。

教会は、教会自体に欠陥があることに気づかなかつたわけではなく、明らかに理想と現実との間にギャップがあることを知っていた。従って教皇の権限、制度から生じた腐敗、あるいはその教義などの問題を再検討していた。しかし、是正の必要を認めていながら、教会は、内部の手によって是正するのが妥当であると強く主張して、ローマ以外の権力が改革を行うことを断固として認めようとしなかった。

ルター、他の人々が100年以上もの間、試みては失敗を繰り返していた改革を、急速に進め、成し遂げている。しかしどのようにして、マルティン・ルターは改革を成し遂げることが出来たのだろうか。彼の思想には、新しいものはほとんどない。大半は、彼以前の神学者たちによって提起されたり、暗示されていたものであるのに。

このことをもう少し深く理由づけるために、そして mennomite 派と Amish 文化が育つ社会的背景にもなるその時代を今少し具体例を上げて考えてみることにする。そこで改革の舞台をジュネーヴへと移すことにする。1530年ジュネーヴは、商業と製造業の中心地として栄え、スイス連邦の一独立共和政体となっていた（ジュネーヴは、スイスのどこよりも遅く独立している。）ジュネーヴも、スイスの諸州と同じように、市参事会によって自治を行い、この参事会は、市政と同時に宗教的な事柄にも管轄権をもっていたようである。然し人々は騒々しく、規律もなく、新たにかち得た自由に酔いしれ、外国人には、注意、うた

ぐり深かった。宗教に関しては、つまり彼らの信仰は、ルターとツウィングリの理念が雑然と入り混ざったものであった。しかしここでジャン・カルヴァンの厳格な魂が登場する。彼は幼い頃から、非常に几帳面な性格であり、何事も完璧でなければ承知せず、他人に対しても自分自身に対してもきびしさを要求した。神の最も重要な面はその絶対的な主権であると考え、“キリスト教綱要”を執筆した。“綱要”の根底にひそむ考えは威圧的なものであったかも知れないが、この本自体は、明快に、論理的に、体系的に改革の理念を述べたもので幾十万人の人々の心をとらえたとされている。“綱要”が十戒の解釈をもって始まっているのも、カルヴァンの法律尊重主義を考えれば、納得がいく。旧約聖書はカルヴァンに多くの示唆を与えているが、彼はそれによって、ルターとなえる神よりもいっそう近づきたい神エホバを描き出している。だが救いの問題については、ルターやカトリックと見解を異にしている。即ち、ルターは、「救いは善行によって得られるものである。」とし、カルヴァンは、この原理に基づいて、「選民の教義」を作り、「神が救いたもうのは選ばれた者のみである。」としている。そして、人間を2種類の支配体制に従属させている。それは「世俗の法」と、「神の法」である。「世俗の法」は、全般的な平和と安寧をもたらすべく存在し、その法の施政者に反抗することは、同時に神に反抗することと見なした。

このカルヴァンは、ルターやローマ教会に劣らぬ激しさで、反対行為を悪魔の仕業と見なし、異説を唱える者を圧迫し、彼の求めるすぐれた聖職者たちを養成している。彼のアカデミーの卒業生は、カルヴァンの影響力を身につけて、全ヨーロッパ中に広がり、遠くスコットランドにまで散っていった。そしてこのスコットランドで、彼の教えは、引き継がれ、スコットランド人の精神にカルヴァン主義を注ぎ込み、未発達だったこの国の社会と政治の機構を変革するという結果をもたらすことになる。ヨーロッパのカルヴァン主義を今少しはつきりと、説明する為にスコットランドのカルヴァン主義の歴史を考えてみることにする。

歴史的に見て、16世紀のスコットランドは、政治的にも経済的にも、ヨーロツ

パの列強国にはるかに遅れをとっていたようである。その大半の統治を行なったのがロレーヌのメアリーで、ジェームズ5世の未亡人であり、のちのスコットランド女王メアリーの母親として、彼女が成人に達するまで、摂政の役をつとめている。ロレーヌのメアリーは、フランス人で、カトリック教徒でもあった——メアリーはギーズ公の妹である。公はフランスにおけるカトリックの政治的指導者で、その相続人はフランスの王位を巡って、アンリ4世と争っている——。彼女が統治していた頃、スコットランドでは、フランスに対する反感が高まり、また、司教や司祭が人々に重い義務を課していたことから、反聖職者感情も高まっていた。丁度この頃、スコットランドの農民の出で、カルヴァン主義を奉ずる巡回説教師ジョン・ノックスが、宗教改革の種子をまいたのである。

カルヴァンが主として身分の高い市民たちに向かって説いた選民の教義をとり上げ、それを大地に根をはった人々に与えたのである。教会に俗人の声を反映させようとしたのだった。かつてスコットランドでは重要視されなかった平民たちにノックスのメッセージは、砂に水が浸みこむように浸透していった。

メアリーの信ずる宗教と権力は、彼女が蔑視していた平民たちによって軽視され、後にノックスはスコットランドのカルヴァン主義を不動のものとしている。改革教会への抵抗はほとんどなく、迫害もなく、スコットランドの宗教改革は、ヨーロッパのどこよりも流血沙汰が少なかったようである。それにひきかえ、ヨーロッパのほかの場所では、多くの血が流されている。

既存の秩序に挑戦して、自らの自由を勝ち取った改革者たちは、例外なしに他人が反対するのを認めようとせず、彼らが抵抗したカトリック教会と同じように、彼らも意見の相違を異端として、異端には迫害をもって当たった時代である。

迫害の中でも最悪のものは、改革運動の、さまざまな分派の信者たちから成る「再洗礼派」に対するものだった。“再び洗礼すること”を意味する再洗礼主義は、成人の洗礼を実行していかいくつかのグループに包括的につけられた名称である。ローマ教会と、大多数の改革者たちは、洗礼を幼児に対して行っ

ていたことに対する新しい思想（抵抗）である。再洗礼主義者の中には、「世俗政府は罪深いものである。」と考え、キリスト教徒たるものは、世俗の政府に参加してはならないという信念をもっている者さえいたとされている。

そこで当時の人々の中には、再洗礼主義は社会を形づくっているすべてのものを破壊する宗教だと考えるものもいた。しかし歴史的には、過激な無政府主義者のごく少数の再洗礼主義者であって、大多数の再洗礼主義者は秩序を守っていた。そして危険な時代でしかも偏狭な時代にあって、この再洗礼派は、礼拝の自由を信条の教義とした唯一の宗教グループであった事は紀要第20巻31号でも述べた通りである。重複する所があるかもしれないが、今少し歴史的に調べてみることにする。

最初の再洗礼主義者は、1525年チューリヒに現われ、続いて各地で、あるいは個々に、あるいは避難して来た人々に啓発されて、その数を次々と増やしていった。どこへ言っても、彼らは迫害を受けている。その地で権力を握っている宗派が、ルター派・カルヴァン派・カトリックのいずれであっても、迫害されることには変わりなかったようである。再洗礼主義者の生き残りは、ヨーロッパ中をさまよい歩き、最後にモラヴィアやポーランドに、安住の地を見出した者もいれば、アメリカの植民地へのがれ去った者もいた。

ペンシルヴァニアのアミッシュやアメリカ中西部の再洗礼主義者であるアマン派やメノ派は、再洗礼運動の子孫である。今日に至っても彼らは、一般社会と離れて自分たちだけで生活している。

ペンシルヴァニアに住む“plain people”即ちアミッシュは宗教の実践者としてアメリカにのがれて来た人達である。彼らのルーツはドイツ人やスイス人であることをランカスターの老人は話してくれた。

“We choose to live in the past. We form our own communities. We keep to ourselves. And we almost always have some deep belief that helps hold us together, generation after generation.” The Amish, the “Plain People” of Pennsylvania, are Americans who live that way. We trace roots to Germans and Swiss who fled to America to practice our

religion without fear.

16世紀に於ける再洗礼主義者たちの普通と違った奇妙な行動ぶりは、改革派の主流をとまどいさせるほどのものであったから、彼らは自分たちの運動の末端に、このような突然変異が加わるのを許さなかったようである。再洗礼派が確かに変わり種に見えたのであろう。何故なら、宗教改革は、もっと時代風潮と調子を合わせた人々によって伝えられていたからである。その代表者が、最初に歴史的に述べた、ルター、ツウィングリ、カルヴァン、ノックスである。彼らの理念はさまざまだったが、基本とするところは皆な同じであった。つまり、聖書に信をおき、信仰によって認められ、ローマ教会の支配を拒否したことである。彼らがそれぞれ違っていた内容はこれまで論じて来た通りで、民族意識と政治条件のためであった。彼らがローマ教会に挑戦したのはただそれが腐敗していたからだけではなく、またその腐敗が教義を混乱させたからばかりでもない事は前述で論じた。即ち一口に理由づけすれば国民国家が成立しつつあったからなのである。だから俗人と聖職者が支配権の獲得を目ざして、権力闘争を繰り広げた事も論じて来た。

これらの改革者たちの運動が、（しかし、当の改革者達は気付いていなかったかも知れないが）、Amish 派、Mennonites 派に大きく影響を与えていたことは確かである。

数世紀を過ぎた現代に於いても彼らの信仰が変わらないのはいったい何であろうか。

電機・電話・自動車・空気の入ったタイヤを使わないと決めた宗教的原則とは何であるのか。又その伝統文化が犯されたくないとするアミッシュ文化が現代にどのようにして外の世界から隔離する為の努力をしているかを調査してみた。例えば、Amish の伝統を見れば大よその理解が得られるであろうが……それ等は、Amish の人々の一頭立ての軽装馬車 “Baggy” や流行を追わない古いヨーロッパの服装（ボタン、ジッパーを使わないで、“hook and eyes” の使用）を見れば、彼らの信仰文化が一目瞭然である。そして何と言っても、彼ら自身勤勉と手作業を神への忠誠と考えていることであろう。

彼らはアメリカに入植した当時 “Pennsylvania Dutch” と呼ばれていた。当時のアメリカ人達には “Deutch” 即ち “German” を正しく発音できなかったようである。

彼らの信仰は、

“Horses and hard work keep people nearer to God.” を信条として、つまり神は電気や車を使うことを好まない。ロバや馬を使って土地を耕し、又そうすることが、国を社会を最も豊かにすることが出来る。

「神は人間が自然や土、天候と調和して働き、植物や動物の世話をすることを最も喜ぶ」、と信じているようである。バイブルの言葉を借りて言えば；

“God created Adam and Eve to replenish the earth ,and subdue it :
and have dominion over the fish of the sea, and over the fowl of the
air, and over every living thing that moveth upon the earth,”

Man’s highest place in the universe is to care for things of creation.”
である。 (Ge-nesis 1 : 28)

Amish 社会や Mennonites 派の社会で生活するとき、人は厳しいまでに “independent” であることを要求される。自分で考え、自分の判断で行動する。アメリカ社会の “individualism” は個々の人間の意志は何よりも尊重されねばならないし、またそれがアメリカの特産物であるのだが、ヨーロッパのローマ宗教の文化を源流とする Amish や Mennonites 派に於いては、自らの宗教を自らの生活環境の中で強化された “independence” を彼らの文化価値とする精神 (“You must look after yourself.”) は、ローマ教会に挑戦し、迫害を受けてアメリカ植民地にのがれて来た彼らの先祖の、そんな背景があったからであろう。

アメリカ人のパーティー好きや、夫婦社会であることや、知らない人にも “hi !” と声をかける親しさの現象や “mobile society” と呼ばれる、そのような “high mobility” の社会は Amish 文化には全く見られない。アメリカ社会におけるバラバラになりそうな人間関係をつなぎ合わそうとするかのようなパーティーをはじめとする、親しさは、人と人とをつなぐ接着剤のように思

えてならない。しかし、Amish 社会や Mennonite 社会には、そんな生活価値観は不要である。相手の力を頼りにする人間関係は存在しない。あるのは相互扶助の精神文化であろう。人は一人では生きて行けない。「個」の尊重と「自立」とを行動原理にしてはいても、それだけでは人は孤独に陥るし、人がバラバラでは、特に Amish や Mennonites のような電気や車を使わない生活文化で地域社会からの隔離を価値観の核とする社会では、必然的に相互扶助の必要に迫られたということが理解出来る。アメリカ国家の幼少期には、又、辺境の地では、互いに助け合わなければ死に至ることさえあった。弱き者を助けることは、ピューリタンの教義の説くところでもある。“Reciprocal Relationships” と “conformity to specific society” を重視する行動様式は、21世紀の今もなお脈打っている “voluntarism, (community, consumerism, charity, philanthropy, donation, ” など) の言語表現にも極めてアメリカ的な精神を表す伝統がある。さらに具体例に即して Amish 文化と Mennonites 文化の価値観を考えてみることにする。尚問題提起をしながらその問題点を考えてみる。

※Does anyone ever join the highly diverse Mennonite—Amish family?

Does anyone ever leave?

さて、ここでは、“outsiders” が異種独特の、しかも18世紀、19世紀の生活価値観をもつ、Mennonite 系 Amish family の仲間に加わったり、或は仲間を離れていくことがあり得るかどうかを考えてみる。

再洗礼派の集団の中でも、The “Old Order” Amish は子供達を教会区内で教育することを強調し、“outsiders” が仲間に入ることにより集団が大きくなるより、彼ら自身の家族の為に集団を維持しようとする。

然し、一方、多くの “modern” グループ、即ち Mennonites 派の多くは、布教を強調し、“outsiders” の為に、より多くの信者を増やすことをする。

“Be ye not unequally yoked together with unbelievers ; for what fellowship hath righteousness with unrighteousness ? (11 Corinthians 6-14)
従って Amish 派は New Testament の福音書の教えを強調しないだけでなく、

ましてや外の世界の人に伝道することもしない。つまり仲間を作ることに関心を示さない。子供達も仲間を離れていくのも自由である。こうした一般的なパターンはあるものの、世代が変わるにつれて、多くの例外も生じていることも確かである。

さて次に“Outsiders”側に立って、今一步 Amish の社会集団を仲間意識の観点から考えてみる。

a) What may a fellowship require ?

最初から、Mennonites 派にとっては、この問題が大きな関心事であった。然し Amish にとっては、この問題に関して、宗教改革者との関係を全く断ってきたし、宗教改革者からも、Mennonites 派からも離れて行ったようである。言い換えれば、Amish 派がそれ程までにして彼等との関係を断つ（信仰の基準）、Amish だけの仲間の中にいることの価値観は何であるのか。また、もし彼等がお互いの遺産相続権の問題をかえているとすれば、どのようにして内容を予測し作成するのか。どのような基準がお互いの了解のもとに子孫に伝えられ、そして実際に実施されるのか。Amish 社会とバイブルの教えに忠実でない信者は、彼等の言う仲間から離れて行くことを求められるべきなのか。等々について具体的に調べてみた。

① Joining について

“chosen people” or “peculiar people” バイブルの教えが外の社会との関係を制限しているのではなく、バイブルの教えに忠実であることの誓いと、教会社会の規律を生涯離れないとする教会社会への約束である。その生活、即ち “straight and narrow way” が彼らをして自分たちのことを “chosen people” と自覚させているのである。The Old Order Amish の共通点が、即ち community disciplines の厳しさが故に outsiders にとって、その社会に入っていくことを難しくしているのが現状である。

Old order Amish の社会に、現代的なアメリカ人が彼らの仲間に入った歴史は全くと言える程ない。否や、Mennonites Amish であれ、ほんの 2 例し

か聞くことが出来なかった。outsidersである普通のアメリカ人や、少し現代的な Mennonites は、異口同音に次の様に言う「それは the Old Order Amish が厳しすぎるからだ。」

一方 Amish の司教は、「大ていのアメリカ人や、多くの Mennonites は、真のキリスト教の教えに従う意志がおそらくないのであろう。」と反論している。

然しここで述べておかねばならないことは、勿論 outsiders であってもこの“Old Order Amish”の社会に仲間入りすることが出来るのです。例えば、彼らの話によると、

北アメリカでは一流の歴史家の一人ですが、彼はカトリック教徒として成長した若者で、ノートルダム大学に進み、そこで the Old Order Amish のことを研究し、後に Amish girl と結婚し、the Old Order Amish として教会社会で生活している例がある。このようなことはよくあることではない。即ち日常の出来事の例としては極めてまれである。唯このアミッシュの研究者は、熱心な Amish の伝統文化と、キリスト教の教義の実践家でもあった事が他の宗教家の場合と違うところである。このように Amish の場合、仲間が増えていくことは先ず考えられない。

唯一の問題は、“chosen people”として本当に自ら進んでキリスト教の門弟としての身分を受け入れ、又、Amish 社会の宗教的伝統文化の厳しい規律に耐えられるかどうかである。

この社会集団の一員である為の必要条件が厳しければ厳しい程、外の世界からこの社会集団のメンバーに加わる事は益々不可能に近く成るであろう。

② The ban and shunning について

自由というものがいかなる形にせよ、ロマンチックな願望に敬意が払われる社会では、その遂行に当たっては無情な決意が要求される。逆に Old Order Amish 社会では、教会社会の規律とその遂行がうやむやならば、それこそ無情で、残酷なものだと考える。初期の再洗礼派達は、次のように考えていた：

新約聖書の教えは、「教会が人を厳しく指導すべきである。又もし罪を犯した人に悔い改めるように愛の導きを何度となく重ねても後悔しない時には、悔い改めるまでその教会社会から破門すべきである。」としている。

もしそうしなければ、仲間は次第に規律を失う事になると考えたのであろう。破門の目的は、罪を犯したメンバーが再び仲間に戻ることであった。即ち人に害を与えたり、破滅させようとするものではない。この厳しい Amish 社会から実際に破門された人は、極めて少ない。Old Order Amish でも、仲間を避けるやり方にはいろいろある：

最も厳しい形が、破門中のメンバーを仲間から完全にシャットアウトするやり方である。破門中のメンバーはその事にひどく苦しむ。例えば、同じ食卓で食事を共にすることが出来ないし、仲間との仕事も出来ない。又付き合いとしての仲間を訪ねることも出来ない。

“But now I have written unto you not to keep company, if any man that is called a brother be a fornicator, or covetous, or an idolater, or a railer, or a drunkard, or an extortioner ; with such an one no not te eat”. (1 Corinthians 5 : 11)

仲間の破門・追放とは対照的に、

主に若者ではあるのだが、かなりの人がより個人的な自由や、もっと深い神への敬けんを求めて、自発的に the Old Order community を離れて行っているのも確かである。

しかしそれにも増して、the Old Order Mennonites と Amish の数が急速に増えているのも一面問題であろう。平均50人という一大家族では、農地が彼等にとっては不足なのである。兄弟の中には別天地を求めて他の州に移住すべく community を離れざるを得ない者がいることを思うと、アメリカ政府の対応に期待する以外に善策はないのが現実で、政教分離のアメリカ社会の中で、the Old Order Amish Community の21世紀の姿が outsiders である私たちの興味をそそる。地球環境破壊が進む現在社会に於いて是非保護したい存在である。

※ “... Wheose adorning let it not that outward adorning of plaiting

the hair, and of wearing of gold, or of putting on of apparel…”
 (1 Peter 3 : 3)

一口に言って、彼らの独特な服装、即ち質素、地味な服装の理由が彼らのこのバイブルの教義であろう。

彼等の神への敬けんな生き方が、即ちバイブルに忠実である Amish や Mennonites にとって、服装は単に深く強い信念の一つの表現にすぎない。outsiders と違って見せる為に始めたのではない。謙虚、非国教主義、卑下を目的にしたのである。

再洗礼派運動の初期には、上記のような規律を強調したが故に現在のような服装の基準が出来あがったのではない。終始一貫して地味で飾らない服装であった。その服装は同時代の百姓のスタイルを表していた。しかしこれら再洗礼派の主体性が「世間」との行き来が増すにつれておびやかされ始めたので、特定の服装を強調することによって昔は目だたなかったのが、後に世間の目につくようになり始めたのであろう。又再洗礼派運動の崩壊を感じていた指導者達は自分達の主体性を補強する為に、色々な方法に手をのばし始めていたとされている。再洗礼派グループの中には、服装は決して争点ではなかったが、スイス系ドイツ人のグループの多くは特定の姿をするのは自分達の仲間が世間や、自分達の生活規律に従わないのを避ける為に、又謙虚でいる為に大切であると思っていた。このようにして the Amman Group 即ち Amish の指導者は再洗礼についてだけでなく同じ服装をすることを主唱した。

前回の第一説（紀要第20巻31号）で述べた様に Amish は1727年の初期、スイスからペンシルバニアに来たのだが、

ヨーロッパの信者につけられた名前は：

Amish Mennonites つまり Amish であった。しかし Old Order Amish という名前は New Amish や Amish と同じ生活習慣を真似ている集団と区別する為に19世紀になって一般に使われるようになった。Old Order Amish は礼拝の為に各個人の家に集まるので、教会をもつ Church Amish と区別する為

に“House Amish”と呼ばれる事がある。厳しい生活習慣の固執と近代化に否定的なことがOld Order Amishの一貫した特徴である。周囲の影響の強い文化が完全に変化してきているのに、Old Order Amish社会は比較的安定している、即ち変化が見られない。一見時代遅れと考える人もいるが決してそうではない。強い信念である。

そのAmish社会は沢山の違ったタイプや先祖の系列があり極めて複雑であるが、Old Order Amishには次のような共通点がある。：

- ① 教会区域内の個人の家での礼拝
- ② 馬、ロバによる荷馬車の使用（例 baggy）
- ③ ドイツ語なまりのペンシルバニア方言の使用
- ④ 地味で質素な特徴的服装
- ⑤ 結婚した男性は鼻ひげは削るが、アゴひげを削らない。
- ⑥ 女性は髪を切らない（真中で分け、後でたばねる）
- ⑦ 服ホックの使用（最近はボタンを使用しているアミッシュもいる）
- ⑧ 電気、電話、自動車の使用禁止
- ⑨ 空気の入ったタイヤをつけたトラクターの禁止
- ⑩ 小学校（1年～8年生）以上の公教育の禁止。
- ⑪ 暴力、戦争への参加は、イエスキリストの教訓と模範により禁止

Old Order Amish社会ではこれらの“Cultural Themes”即ち宗教上の規律としての社会的ルールはAmish社会構造上極めて大切な掛わり合いを持っているし、アミッシュの若者の教育に大きな役割を果たしている。

“…replenish the earth, and subdue it ; and have dominion over fish of the sea, and over the fowl of air, and over every living thing that moveth upon the earth…” (Ge-nesis 1 : 28)

「宇宙における人間の最高の仕事は神の創造物を世話することである。」と説いている。The Old Order Amish社会は移民した当時からの沢山の農業経験と伝統的知識を身につけている。農業が父から息子にゆずられるように、家畜

類の世話と農業技術に関する経験と英知も父から子に伝えられる。Amishの経済は勤労、協力的家族労働、作物と家畜類の生産性、そして節約のコンビネーションである。Amishの服装はこの農業を中心にしたAmish自身のライフスタイルである。

(1) Old Order Amishの服装

男性（子供も含めて）は黒ずんだ服装、折りえりのついてない上着、ズボンつり、白又は地味な色のパステルタイプのシャツ、黒靴、黒又は麦わら色のつばの広い帽子をかぶる。髪はえりのところまでで切る。あごひげは結婚するまで削るが、結婚したらのばす。鼻ひげは歴史的に軍隊を連想するので禁止である。女性の服装はゆったりとした長いスカート、長そで、高いえり、ケープそしてエプロンを身につけている。白又は黒のエプロンですっぱりつつんでいるが、服は紫、緑、灰色、青或は茶色である。

女性は髪をを切らず長い、真中で分け、戦前の日本女性のように後頭部にまるいだんご状の形でまとめている。そしてしっかりとりのりづけされた深い“head covering”なるもので髪をつつんでいる。(Corinthian 11:2-1)による。外出時には、女性は大きな黒いボンネット（ふちなしの顔をすっぱりつみこんだような帽子で、あごの下でひもをむすぶもの。）をかぶり、肩にはショールをかけて出かける。勿論宝石類は一際、身につけない。

(2) Old Order Mennonitesの服装

男子の服は、Old Order Amishと同じ色型で、えりは折り返しのない、垂直な上着を身につけている。唯違いはボタンを使用する点である。服の下に着るシャツは普通白かうすい青である。帽子はOld Order Amishよりやや巾の広いふちと山の高い麦わら帽子をかぶっている。あごひげはのばさず、さっぱりした身なりを感じる。

女性の服装は、Old Order Amishと色の一部及び、材質を除いて、型はほとんど同じである。やや明るい色を使用する女性もある。

髪型も、“head covering”も同じである。

(3) 他の“Swiss-German”派

他のスイス系ドイツ人の Amish もまた Old Order Amish の服装を大体維持している。しかしこの一派では、沢山の種類がありバラエティに富んでいる。上着にはボタンを使用しているものもあればフックを使用しているものもある。帽子は黒色で、Old Order Amish より慣習的なものをかぶっている。あごひげは時にはやぎを想像させる。しかし大ていの人には長くのばさず、短かくカットしている人が多い。

女性の服もまたバラエティに富んでいて、スカートは Old Order Amish の女性のスカートに比べ短いのが普通で、必ずしもエプロンは身につけず、ケープも服も同じ地味な材料を用い、“head covering” も the Old Order Amish とははっきりした区別が見当たらない、がただ四角い形が多く見られる。

上に述べた Conservative Mennonite とは違って、New Mennonites 派の間では、世間一般の人と違った服装というのは、段々と消えつつあるのが現状である。男性は慣習的な服を買い、女性はもはやケープを作らなくなったと老女は嘆いている。“head covering” は短い髪の上にだけのせているという感じである。

既に独特な服装を全て放棄してしまっている多くの他の Mennonites 達もいる。アメリカ移住以来、Old Order Amish と同じく質素と謙虚を守りつづけている Mennonites もいれば、極めて意識したファッションを追う Mennonites もいるアメリカ社会である。勿論、Old Order Amish とは相互関係はなく、“church district” も別の地域に移住している。Old Order Amish のように完全な世間からの隔離を社会規律としておらず町への買物も多く見られる。

さてこれらの服装に見られる文化的ルールは Amish 社会の若者の教育に於いて極めて重要な役割を果たしている。

Amish はアメリカ文化の主流をなしているのでもなく、宗教グループの主流でもない。彼らの世間から離れた社会生活（農業を中心とした教会区と言う）を見て、世界の社会学者たちは彼らのことを宗教グループと言うよりむしろ社会集団と見なしている。彼らの大社会に対する否定的関係（態度）の為に、彼らは価値ある Amish の文化に対抗する世間から自分達を守る事が出来るので

す。周囲の近代化する移動性（交通機関）、不安、落ちつきのない環境に直面して、Amishはお互いの仲間をそのようなアメリカ社会のシステムから守り続けている。

世間の成功や生活水準は彼らにとって大きな心配でもある。だから世間からの隔離と独特な服装は最も重要な Amish の生活様式になるのである。若し私たちが、Amish の教育目的を理解したいと思えば、彼らの世間からの隔離と農業を基盤に考えた服装の中心的な概念を大いに評価しなければならないと思う。

アメリカ社会のように最も近代化された国で Amish が生き残るには、地理的にも精神的にも今迄以上の結束と隔離が必要となろう。そして、教会社会区域内で相互援助と結束力は Amish 社会がうまく機能する為には益々重要になって来ていると言える。最後に、この3年間、研究を続けるに当たり、いくつかの、Old Order Amish の家族や、one room school の Mr. Scott 先生、そしてあの大きく、たくましい手で握手をして歓迎、協力してくれた Dr. Donald B. Kraybill 先生と Mr. & Mrs. Golin に感謝したい。

今回は、“The Root of Dutchified English” について研究を進めたいと思います。御意見・御助言をお願いします。

Notes and References

Bibliography :

- (1) Dr. Thomas L. Newcomb
“Amish and Conservative Mennonite Culture and schooling” 1988
- (2) Dr. Thomas L. Newcomb
“Conservative Mennonite and Old Order Amish Doctorines, Discipline, Articles of Faith, and their Dictating Holly Bible Passages” 1982
- (3) Dr. Donald B. Kraybill
“The Puzzles of Amish life” 1990